

令和4年度第1回小学校ゼミナール議事録

2022年度8月8日(月)

於：広島大学

発表者 兼 参加者：影山和也（広島大学准教授）植田悦司・結城和夏・岩本充弘（広島大学附属小学校教諭）小林秀訓・佐々木諒（広島大学附属東雲小学校教諭）石川雅章（広島大学附属中・高等学校教諭）

1. 協議の概要

今回のゼミナールの目的は、研究メンバーの顔合わせ、小学校ゼミナール開催の目的の確認、本年度以降の研究計画の立案である。今回は、各々がプレゼンを行う形ではなく、キーワードを挙げながらホワイトボード上で研究のアイデアを洗練することに努めた。指導論や教材論等々、紆余曲折しながら、およそ3時間の研究協議が行われた。

2. 協議内容要約

まず、日々の実践における課題意識や問題点が議論された。具体的には、「授業研究のサイクルが一過性のものになりがちで積み上げがなされていないのではないか?」、「附属学校として公立の学校現場に還元できる要素(=附属学校だからできると言われないために必要なこと)は何か?」に議論の焦点が置かれ、各附属での実践を踏まえながらその対応・対策を検討した。

そして、前者の疑問に対しては、2030年以降の社会を見据えた算数科カリキュラムの構築を目指し、日々の教材の積み上げや数学的内容の系統性を継続的に精査・議論していくことで解決できるのではないか?との考えに至った。また、そこでの精査・議論の内容を書籍の形で整理することで、附属学校に閉じない教育実践となる(他の学校現場にも還元できる)ため、後者の疑問に答えることにもなるのではないか?と意見が出された。以上の議論を受け、今後小学校ゼミナールでは、「2030年以降の社会を見据えた算数科カリキュラムの構築」を行うこととした。

次に、カリキュラムの構築にあたって、「コンテンツベースの議論」にするか「コンピテンシーベースの議論」にするかが検討された。我が国においては、近年「ルーブリック評価」や「真正な学び」等々のキーワードが話題を呼んでいるが、小学校ゼミナールの歴史的な経緯を踏まえれば、キーワードを踏襲するよりも、それを超える新たな教育理念を提唱していくことが望ましいことが確認された。そこで、当面の間は、コンテンツを極度に限定したり、コンピテンシーのような抽象論に走るのではなく、実践を持ち寄り、その良さや課題、実践の中に見える児童・生徒の生き活きとした姿を具体的に語り合うことで、これからの算数の学びに欠かすことのできない要素を抽出し、新たな教育理念として提唱していく方向性で議論が落ち着いた。

次回の開催に向けては、「実感を伴った算数・数学の学び」を各教員が自らの実践から持ち寄ることを課題とした。なお、ここでは校種を小学校には限定せず、小学校1年生～高校3年生までの実践を幅広く集めることで、視野の広い議論を目指すこととしている。

(文責：石川雅章)